

我が青春

静岡県 安江 進

青春時代のシベリア抑留体験の一こまを記します。

昭和十六（一九四一）年三月に静岡県富士郡芝富村国民学校卒業、四月一日茨城県下妻村の義勇軍内原訓練所に入所、三カ月の訓練を終え、同年六月二十五日、勇躍、福井県敦賀港より暖かい母の心に背いて遠い満州へ旅立った。そして旧満州国の牡丹江省一面波大訓練所に入所。同年七月関東軍特別大演習に動員され図們線の朝陽川貨物集積所の警備に当たり二カ月ほどして黒河省黒河の大額訓練所に移動し、黒龍江をはさんだソ満国境の任務についた。その年の十二月八日、日本は太平洋戦争に突入した。

翌年二月に南満州鉄道株式会社募集に応じ哈爾濱鉄道教習所に入學六カ月間の勉學。昭和十七

年七月三果樹機関庫に配属された。そして昭和十九年十二月一年繰上げ徴兵検査を受け甲種合格。昭和二十年六月根こそぎ動員で召集され南満の通信部隊に配属され、昭和二十年八月十五日たった二カ月で兵隊も終り、ソ連軍の俘虜となった。これからが苦難の始まりであった。

牡丹江に集結され千人単位、黒河からアムール河を渡り対岸のブラゴエシチエンスクへ、そしてシベリア鉄道で日本に帰るからと汽車(貨物車)に詰め込まれた。列車はいつまで走っても一向に海が見えない。北へ北へと七日間ほどして海が見えた。いよいよ日本海だ。列車から降りて海の水を飲んでみたが真水であった。バイカル湖であった。そしてイルクーツクの駅で降ろされた。そして収容所(ラーゲル)に入り、その時は昭和二十年十月ごろだと思う、寒くて寒くてたまらなかつた。一カ月ほどしてイルクーツクの駅の近くの収容所に移動、そのころとなるともう雪が降り始め、駅の除雪作業また石炭の積卸と仕事の内容が変わった。

しかし仲間たちも作業意欲がなく三人寄れば故郷の話、ぼた餅、寿司、白米のご飯等々、食べる話は尽きない。

私は運が良かったのか比較的楽な煉瓦工場。工場内暖かく仕事も楽であった。工場長は女性であった。作業員はウクライナ人の女性と一緒に大変美しい女性であった。私も二十歳で何かと話が合、割合に楽しい作業場でした。若い男子は動員され、あとは老人ばかりであった。

私は煉瓦の元になる「ネンド」をトロッコで運搬する仕事でロシアの若い女性十八歳と一緒にしました。名前はフレローナといい、体重が八十キロも、私は五十キロ、よく東京日本の話をしました。

若い二十歳の青年で女性に触れる事がなかった僕は、腹が減ついても胸がどきどきするのを憶えています。

この国は電力事情が悪く、よく停電し、その都度作業が中断されるのでこれがまた楽しみでした。作業はあまり大変でなく収容所の日本人は六百人

ぐらいで死亡した人は私の知る限りでは二名ぐらいだと思えます。私達の楽しみは食べることだけだった。黒パンが主食で副食はスープ。冬は野菜がないため鳥目が増えた。

魚はニシンがよく出た。数の子も毎日のように食前にあがった。何十年分ぐらいの数の子を食べた。お盆と正月と一緒に来たようでした。ロシア人は生の魚をよく食べたようでした。

収容所の生活に大分慣れ、昭和二十三年七月の夏の暑い盛りに六百人のうち三百人がダモイを許され私も三百人の中の一人でした。

二週間ほどかけてナホトカに着きました。岸壁に日本人を帰国させる出迎えの興安丸という船が浮いておりました。浜辺に集められ日本人の指導者が声高く偉大なるスターリン大元帥をたたえる演説をぶった。そしてこの部隊は民主化されていないと言ひ、三百人ほどまた元の収容所に逆戻りさせられた。翌月には残りの半分が他の部隊と共に足かけ義勇軍、満鉄時代合わせて八年目による

やく祖国日本へ、舞鶴港に到着した。緑の山々が目に飛び込んだ。これで確かに生きて帰ったとの実感が湧いてきた。

現在年齢八十三歳、苦難の青春であったがよく生き抜いたものだ。

義勇軍、そして満鉄へ現役徴集で軍隊へ。富士市の語り部の会で沼津市の秋本さんいわく、軍隊は運隊だ、一寸先は分からない自分で自分の運命など決められることはできない、大きな渦巻きで一人の人間など「チリ」「アクタ」だ。

残された人生を最愛の妻と二人で有意義に、そして大事に生きたいと思えます。

略歴

- 一 大正十四年七月五日生れ
- 二 昭和十六年三月三十一日 富士郡芝富村国民学校卒業

- 三 同年四月一日、満蒙開拓青少年義勇軍として茨城県の内原訓練所入所、同年七月渡満旧満州国牡丹江省一面波訓練所入所

四 同年九月黒河省黒河の義勇隊大額訓練所移動、ソ満国境警備の任務につく

五 昭和十七年二月満鉄哈爾濱鉄道学院入学、

同年八月に三果樹検車区に配属された

昭和十九年十二月、一年繰上徴集で徴兵検査

昭和二十年六月現地召集

同年七月南満の通化の部隊配属、たった一カ月の兵隊だった。

同年八月十五日敗戦、無条件降伏

同年九月にソ連に連行され俘虜生活、苦難の始まりであった。

昭和二十三年帰国、現在に至る

六 静岡県抑留者協会員 妻と二人暮らし